

はじめに

ICT時代といわれる昨今、医療系のさまざまな分野を取り巻く環境もデジタル化が進み、ネットワーク化されたコンピューター・モバイル機器の活躍には目覚ましいものがあります。電子カルテの広がりや医療機器・医薬品情報のデジタル化の進展は、医療技術の高度化と地域格差の解消にとどまらず、力任せの情報収集作業の軽減や豊富な情報の活用による患者との対話などのアナログ的な活動を促進するなど、医療分野全体に質的な進歩をもたらすことが期待されています。

2006年からは高校でもパソコンを用いた情報リテラシー教育が行われており、大学における情報教育は、コンピューター&ネットワーク入門から専門科目でのかなりのレベルまでの応用へと、幅広い対応が必要とされる時代を迎えました。医学系・歯学系・薬学系ではコンピューターを使って問題を解く全国的な共用試験CBT (Computer Based Test) も定着しています。また、医療画像を活用する機会も増え、EBM (Evidence-Based Medicine) に付随する統計処理も重要性を増し、薬物体内動態でもTDMやPK/PDのシミュレーションを活用するなど、コンピューターを利用する機会はますます増えています。大学における情報リテラシー教育で、専門科目での活用を念頭に置きながら、コンピューターネットワークやインターネットの基本原理などの「情報リテラシー」全般をしっかりと身につけて、さらに日常的に活用していけば、卒後に従事する仕事のさまざまな局面でコンピューターの生きた活用が可能になるものと思われます。

本書は医療系向けの実践的な「情報リテラシー」のテキストとして、多くの大学で利用されてきた「Windows Vistaによるコ・メディカルのための情報リテラシー」をWindows 7とOffice 2010の環境に合わせて改訂したものです。

最近では、検索エンジンがますますその存在感を高めインフラ化しています。また、iPad・スマートフォンなどのタブレット端末の活用やツイッター・ブログ・フェイスブック・LINEなどのSNSの活用が急速に進み、情報共有・情報処理の形態を急激に変えて発展していますが、人同士の繋がりを手軽に実現しさまざまな活動の広がりをもたらす光の面と、個人情報に絡んださまざまなトラブルや社会問題も次々と引き起こしている影の面があり、使用者がソーシャルリテラシーを高め、注意深く賢く使いこなすことが求められます。ICTには光も影もあり、その長所と短所をしっかりと見極めた上で対応していかなければなりません。そのためには、一見まわり道のようにも、むしろ情報やコンピューターネットワークというものの本質を基礎から考え直すことも大切なのです。

Windows 7ではセキュリティ機能が強化され、また、インデックス検索による高速な検索が可能です。Office 2010では、操作ボタンの集合体であるリボンとその上部に配置されたタブによりその多機能性を負担なく活用できるように工夫されており、ボタン操作による少ない手順での作業が可能であり、統一性も高まっています。また、ファイル形式が汎用性の高いXMLへ標準化されていますが、これはデータ活用の大変多い医療系にとって望ましい事です。

本書では、さまざまな作業を通してリテラシーを楽しくスムーズに身につけることができるように、厳密性よりも初心者のポイントがわかりやすく、かつ実践的であることに重点をおいてい

す。授業や授業時間外での学生諸君のパソコン利用における現場経験から、入門者がつまづきやすい点などにも配慮しました。

本書をつくる過程でさまざまなコメントや励ましを頂いた多くの方々，とりわけ，東北大学薬学部・富岡佳久先生，岩手県立大学看護学部・山内一史先生，東北薬科大学名誉教授・松崎久夫先生，星薬科大学・香川博隆先生，神戸薬科大学・木口敏子先生，神戸薬科大学・寺岡麗子先生，日本医科大学千葉北総病院薬剤部・浜田康次先生，高知大学連携医学部門医学情報センター・奥原義保先生，千葉大学名誉教授・里村洋一先生に深く感謝いたします。

また，医療現場から例題の素材を提供して頂いた，あるいは，原稿を査読して貴重なコメントを寄せて頂いた次の協力執筆者の皆様に心より御礼申し上げます。

【執筆協力者】

秋田大学医学部附属病院 医療情報部・大佐賀敦先生

秋田県大仙市薬局すばる・畠中岳様

郡山市医療介護病院・原寿夫先生

日本薬剤師会広報・情報室・林誠一郎様

京都薬科大学・深田守先生

フリーエンジニア・八木栄后様

最後に，本書を出版する機会を与えてくださり，完成までにたくさんの助言と激励を頂いた共立出版の寿日出男氏，日比野元氏に心より御礼申し上げます。

2013 年 2 月

著者を代表して 佐藤憲一